

---

# 神様と魔女の遊び時間

秋人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様と魔女の遊び時間

### 【Nコード】

N8903Y

### 【作者名】

秋人

### 【あらすじ】

つまらない日常が嫌いだけど目立ちたくない

静かにしたい。という真田光秀に、ある日河川敷で会った、アテネエルトリゼと契約を交わし、謎が多い中、魔女と戦うことになった。

命をかけたボードゲームで悪魔を倒し、普通の日常を取り戻せるのか？

## オープニング 始まりと終わりの予兆（前書き）

初めて書いてみました。

下手だと思いますが暖かい目で読んでください。

## オープニング 始まりと終わりの予兆

僕は、つまらない日常が嫌いだった。中学は何もおこさずに卒業して高一になったけど、どうしてもつまらないから、前から興味のあ  
るマンガを描いて集英社に持ち込んでみたら「すごくいいよ。これ  
一人で描いたの?」と、信じられないほどに褒められ、気づいた時  
にはマンガを描く羽目になっていた。「神様ゲーム」というマンガ  
を描いて、その一巻が売れに売れ大人気マンガになった。ごめんな  
さい。本当にごめんなさい。もうペンなんて持ちたくないです。マ  
ンガを描く前まで一度も喋ったこともないクラスメイトからは「サ  
インをくれ」とか「絵を描いて」など色々と騒がれた。もう目立ち  
たくない。静かにさせてくれ。と思い、世の中に五冊だけ本を残し  
ペンを置いた。なのに「何でやめたの?」とまた騒がれ学校に行く  
のをやめた。家にも親が「学校行きなさい」と文句を言われた。  
もう嫌だ。自分には居場所がない。死にたい。死にたい。死にたい  
こんなことを思いながら高二になった。キーンコンカーンコン  
「やっと今日の授業が終わったな。光秀」こいつは、神道 守。自  
分の数少ない友達だ。なぜか知らないけど一人でいる自分にしつこ  
く話しかけて来て、知らないうちに友達になっていた。「光秀」。  
喉が乾いた。ジュース買ってきて「自分を何だと思ってるん  
ですか?」「ん」私の下僕?」「真顔で怖いこと言わないでください  
よ」この無駄にテンションの高い女は、歌夜 秋。中学の時から  
友達で引きこもりになっていた時も毎日家にきてくれた。秋のおか  
げで、家から出れたと言ってもいいくらいだ。「んじゃ、屋上に行  
って弁当でも食べますか?」「おつ、いいね」守くん。「何で、二人  
はそんなにテンションが高いんですか?あと、午後も授業あります  
からね守さん」まあ、なんだかんだで疲れる毎日をおくっている。  
「今度こそ終わったよな」

「はい、終わりましたね」「一緒に帰ろうぜっ」「私も帰る」

今回はパスします」

「何で帰ろうよ」この二人とこれ以上いると頭がおかしくなりそうだ。「とにかく帰りますから、さようなら」帰り道疲れすぎて目の前がくらくらする。限界だ。雨も降ってきたし。橋の上で川を見ながら何時間こうしてるんだろ。あれ？こんな雨の中、河川敷でなにしてるんだろ。あの子？見ると同学年くらいの子が今にも飛び込みそうなくらい、川に身を乗り出してる！「危ないだろっ」「君は僕のこと見えるんだね」透き通った目がすごい冷たい。でも何故か暖かい、人間ではないみたいだ。「僕はね、普通の人には見えないんだよ。名前はアテネ エルトリーゼ。突然だけどパートナーになつて」「へ？」ダメだこの子完全におかしい子だ。「ほら、名前は？」「え、あつ、真田光秀・・・です」なんで敬語使ってるんだろ？というより、近づいてきてるんですけど？足が動かない？

「んっ？」いきなり唇を奪われた？暖かい。ずっとこうしていたい。「はい、契約完了だよ。これからはずっと一緒だよ」え、何？契約？自分が？「そろそろ来るよ」「何が？」

「魔女が」その時、空が光ったと思ったら

黒い翼がついた綺麗なお姉さんが降ってきた

「やっと見つけたわよ。アテネ」誰？すごい、胸がかなり揺れているんだけど。かなりエロい。「光秀。早くこのゴミを掃除してよ」  
まてまて、急展開でついて行けないんだけど

「ウェルスト」魔女が呟いた瞬間、時間が止まった。しずくが落ちてくるはずなのに落ちてこない。「え？時間が止まったの？もうどうなってるんだよっ？」「ほら、光秀も唱えて」わけのわからないまま唱えてみた「ウェルスト」そしたら赤い線で四角い囲いができた「簡単に説明するよ。よく覚えてね。これから戦術的ボードゲームをするよ。ルールは簡単、あのゴミを倒せばいいの」「負けたら？」「死ぬに決まってるじゃないか」こいつ普通に危ないこと言いやがった。「すべこべいってると、殺しちゃうわよ。ぼっや」いき

なり魔女の兵隊が斬りかかってきた。「うわっ？」それを白い騎士がかばった。斬られた騎士は青い光になって消えてしまった。「光秀も念じれば騎士を動かせるから」自分は敵の兵隊一体を倒せと騎士に命令したら騎士一体が剣を振りかざした。相手は盾で受けたが盾が一刀両断されて兵隊も真つ二つにされた

「なんて強さなのっ」魔女はありえないという顔をしていた。「光秀。騎士の強さは光秀の欲の深さなんだ。だからこんなんでも満足してないで相手を倒して」今、自分が欲深いって言われなかった？今は考えてる場合じゃない

相手を倒さないと自分が殺られるんだ。「全軍突撃」一生に一回は言ってみたかった。けど、まさか本当に言うことになるなんて

「隊を組んで二人以上で戦いなさい」魔女も反撃に出る。さすがに二人だとキツイのか何体かは光になった。「一回、退け。体制を立て直す」さて、どうするか。とにかく状況を整理しよう。二十体いたのが十二体になってしまった。二体を自分のそばにおいて十体で勝とう。「よし、二体は自分の護衛をして残りは、固まって背中を預けて戦って」「囲んで袋叩きにしなさい」力が強い自分の騎士は袋叩きになりながらも相手の数を減らしてきてる。魔女はその戦いに集中している。いまならと思い、その戦ってる近くに行つて「今だ、奇襲をかける」そう言つと二体の騎士は外側から剣で一気になぎ倒した。不意をつかれた相手は体制を崩した。二体の騎士の方を向くと内側から斬られ、完全に混乱している

「と、とにかく退いて」魔女が慌てている。なんと、見ていて気持ちがいいんだろう。

相手の兵隊が十五体いたのには今は四体になっている。壊滅寸前だな「囲んでじわじわ追い詰める。焦るなよ」じわじわと時間をかけて相手の兵隊が一体もいなくなった。魔女を守るものが何もなくなつた。「負けられない、こんなところで負けたくない。私が勝つんだ」「気が狂つた魔女が騎士に向かって突つ込んできた。騎士が剣を降つたがそれをかわし騎士を飛び越えた。「さすが魔女だな」と関

心していたら、こっちに突っ込んでくる。その途中に闇の中から大きな鎌が出てきた。

「僕達も迎え討つよ。武器をイメージして、剣がいいな」。剣をイメージして「アテネの言う通りに大剣をイメージしてみた。そしたらアテネが光輝く大剣に変わった」「光秀。私の力を貸してあげる」「アテネの力のおかげで相手の動きが遅く見える。これなら自分でも戦える。剣をよく握ると剣から「あんっ」と何だかエロい声が聞こえてくる。まあ、それはさておき、魔女が突進して鎌を振り上げるのと同時に剣を魔女に突き刺した。血が飛びちって自分の服についているのも気にしないで、地面に倒れた。雨が降ってきて車の音が聞こえる。時間が流れ出したらしい。ということは、ゲームに勝ったということだ「光秀、大丈夫？よく頑張ったね」アテネか。立つとしたがチカラが入らない。意識が薄れていく。気がついた時には、次の日になっていた。眩しい日差しが射し込んで気持ちがいい。横を向くと何故かアテネが気持ち良く寝ていた。．．．寝ていた？何故だ？ここは自分の部屋だよな？確か、昨日雨の中倒れて気を失って．．．どうした？「おはよ、光秀。今日は二人で休もう」「お前、どういうことだ？」「あの後、気を失って家まで運んであげたんだよ」「親によくばれなかったな」「僕は神だよ。光秀の親戚になるくらい簡単だよ」「まさか、親の記憶を変えたのか」「うん、昨日からこの家で暮らすことになったから。よろしくね」こうして光秀のゲーム生活が始まった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8903y/>

---

神様と魔女の遊び時間

2011年11月26日20時49分発行